

第3回 河合隼雄先生追悼記念シンポジウム

河合隼雄を語る

— 日本文化と心理臨床における貢献 —

司会：ただいまより、第3回河合隼雄追悼記念式典、河合隼雄追悼記念シンポジウム、河合隼雄を語る、日本文化と心理臨床における貢献、を始めます。

岡田先生：ただいまアナウンスがありましたように、少し時間は遅れましたけれども、第3回目の河合隼雄先生追悼記念の催しを開きたいと思います。今日は、遠路から多くの10人の先生方と学術顧問である樋口先生をお招きして、5人の方に河合隼雄先生について語って頂きたいと思います。まず最初に、本学学長の鑑幹八郎よりあいさつさせていただきます。

鑑先生：それでは、河合隼雄先生記念シンポジウムの主催者として一言ごあいさつ申し上げます。本日はお忙しい中お集まり頂きましてありがとうございます。本日はご存知のように外で学園祭をやっております、第1日目です。会場の外が少し賑やかかと思います。お集まりいただきましたみなさま、先生方にお礼を申し上げたいと思いますが、その前にちょっと一言ごあいさつをさせていただきます。

この京都文教大学の母体となります京都文教学園は、仏教精神に基づきまして、明治37年1904年に京都高等家政女学校として設立されました。本年で105年を迎えております。現在は幼稚園から大学院までを擁する総合的な学園になっています。京都文教大学は平成8年1996年に人間学部のもとに、日本において最初のユニークな文化人類学科と臨床心理学科の

1学部2学科として発足しました。また、昨年4月に私たち臨床心理学を学ぶ者にとって悲願でありました、日本で初めての臨床心理学部が生まれました。現在は人間学部に現代社会学科を加えまして、臨床心理学部と2学部3学科の大学でございます。臨床心理学の大学院では、これまた初めての臨床心理学博士を2人世に送っています。

京都文教大学の創設にあたりましては、本日の記念シンポジウムの名前をお借りしております河合隼雄先生を学術顧問としてご指導賜りました。本日ご出席の樋口和彦先生も同じく学術顧問として、樋口先生と一緒にお力を賜りました。樋口先生はその後、学長として一昨年まで、この大学を導いておみえになりました。本日は、後で先生のお話を伺えるのを大変嬉しく思っています。

河合先生はその後、国際日本文化研究センター所長を経て文化庁長官なられたということは、皆さんよくご存知だと思いますが、日本文化研究所長と文化長官になられる間に、1年間の猶予がありました。その1年間はこの京都文教大学に研究室をおかれまして、研究をされておられました。私も3年間ほどちょっと外にでておりましたが、その前に私の研究室の筋向かいに河合先生の研究室がありましたので、時々お話をさせて頂いていました。文化庁長官になられましても、京都文教大学のことを気にかけていただいて、学術顧問としてアドバイスを頂いておりました。

本日は、河合先生を語ると題しましたシンポ

ジウムが開かれますことを大変嬉しく思っております。本日シンポジストとして、ここにお集まりの諸先生は、日本の臨床心理学の学会や団体の中心、代表として活躍しておられる先生方です。お集まりいただき本当にありがたいことだと感謝しております。本日の会が、有意義なものになることを心から期待しています。開会にあたりまして、一言あいさつをさせていただきました。ありがとうございました。

岡田先生：ありがとうございました。早速、河合隼雄先生を語るという事で、各先生方にお話いただきたいと思います。順番は、出来上がってきた順番と言いますか（笑）、まず学会が始まりで、認定協会、それから臨床心理士会、それから指定大学院という順で、お話いただくという風にしております。では、まず鶴光代先生から、お話いただければと思います。では、先生よろしくをお願いします。

鶴先生：はい。ありがとうございます。心理臨床学会と河合先生は、切っても切り離せない、そういう関係の中で、本当に河合先生のお陰で、心理臨床学会がここまで発展してきたと、会員一同、心からそう思っております。河合先生は創設当時から心理臨床学会に関わってこられました。昭和60年の11月から3年間、理事長として、会の色々な運営の舵をきってこられました。それからその後、平成6年から平成9年と、またそれに引き続いて平成12年から平成15年と、3期にわたって理事長をお勤めになりました。その間、学会において、本当に多大なお仕事をなされたんですが、その中でも国際交流ということ、これからは非常に重要だとおっしゃいまして、当時、まず中国の心理学会と、交流しようということで、日本でシンポジウムを行いました。それから数年後に、韓国と

交流ということで、日本でシンポジウムを行う、という事で、私たちの活動の目を外に向けてくださるということをしていただきました。実はこの前、中国の四川で、地震がありました。その時に、いわゆる心理的支援を、日本臨床心理士会と、本学会と共同で行いたい、という事で、中国の色々な方面に話を持っていきました。中国では、こういう民間の支援というのはなかなか入りにくいんですね。いわゆる公的な支援でさえその当時、早急にすんなりとは入れない状況があつて、そういうなかで、ひとつその状況を破ったのは、中国心理学会が支援してほしいという風に、心理臨床学会に支援を求めてきたことでした。そういう風に、向こうから我々は求められてるんだ、とそういう事を、日本の文部科学省他外務省にも話しにいまして、そうした省庁の色々なご支援もありまして、我々2つの団体が、共同して心理的支援のメンバーを送ることができました。向こうでは、直接被災者にカウンセリングをする、という事も若干はしたようですが、それよりも、向こうの心理関係者や教員が、被災した人たちに、どういう風に心理支援をしていくかという研修を色々なところで行う、という事に力を入れてきました。中国心理学会や西南大学から、心理臨床学会の方にぜひ支援をしてほしいと言ってきた時に、中国心理学会の会長の張先生が、そのお手紙の中に、以前日本のシンポジウムに招かれた時に、河合先生と親しくお話をして、そういう災害支援というのは非常に重要です、っていう話をしたことがありました、と書かれていました。そういう風に河合先生繋がり、張先生も心理臨床学会に支援を呼びかけられたのだと思います。その両団体による支援を2回にわたって行いまして、それが、基盤になって今ジャイカとして、臨床心理士会の会員が、中国の人たちと共同して、現地で心理的支援の活動にあたって

いるという状況です。心理臨床学会のどの側面をとっても、やはり河合先生の、これまでにしてくださった色々なお仕事が基盤にあって、今花咲いているという感じが致します。

私が初めて河合先生と直接お会いしたのは、昭和52年、1977年でした。福岡で私の恩師の成瀬悟策先生が、10年間にわたって毎年1回催眠シンポジウムというのを開催してまして、そこでお会いしました。その催眠シンポジウムというのは、参加者がシンポジストが十数人とあとは討論者数名のみで、全員がある場所に2泊3日泊まりこんで、シンポジストの話を聞いてみんなで話し合うというものでした。そこで第9回目の、「イメージ」というテーマの時に、河合先生が唯一ひとりの討論者として、その2泊3日のシンポジウムに参加されました。その時私は、催眠療法におけるイメージというテーマで、いくつかの実験的研究と事例的研究を提示して、催眠イメージの特徴というような事を話したんですが、そのときの事例は逆行性健忘という、ある時点で過去の記憶を失ったという、そういう健忘の方に催眠に入ってもらって、そこでイメージを活用して色々なことを思い出す、という事例でした。その時に、いわゆる過去の色々な事を思い出してもらおう手立てとして、これまでの人生の色々な場面について夢を見ますよ、という教示の仕方をしたわけです。夢を見ますよっていう教示をしたっていうことについて、河合先生は「あなたは過去の事実を知りたいんでしょう？過去の事実を知りたいのなら、夢というものを利用しない方がいい」という風におっしゃったんですね。つまり夢っていうのはいわゆる無意識の活動を反映するので、事実を知りたいっていうこととは矛盾するんじゃないか、というような内容でした。私はその時、なるほど、そう言われればそうで、ちょっと安易に夢を使ったかなと反省しま

した。実はその頃、催眠夢に関する実験的研究をしていまして、夢に関心のある時期でした。

それからもう20年ぐらい経った時に、河合先生とちょうど何かの仕事の折に2人になったことがあって、その時そういう先生の発言をいただいたので、「その後逆行性健忘の人には夢を使わないようにしてます」と話したら、「いやーそんな事言いましたかねー」と仰って、そして「いや、夢っていうのはいいやり方ですよ」とってこう仰るわけですね。夢っていうのは、いわゆる夢だから、責任を負わなくていいと。だから、まあ逆行性健忘の人ですから、何かの理由で、自分の過去を忘れたくて忘れてるわけで、ですからそれを思い出すっていうのはなかなか大変。名前とか、自分がどういう人で、どこに住んでたとか、どういう仕事をしてたとかいうことを、思い出すっていうのは現実に戻るっていう事だから大変なわけですね。だけどその時先生は、夢っていうのはそういう現実のことを、まろやかな形にして、自分自身に思い出させやすくする一つの側面を持ってるんだから、僕は昔そう言ったかもしれないけど、今だったらそうは言わないでしょうね、っていうようなお話をされて、またそれはそれで私はなるほど、と感心してしまいました。

それからまた、そのシンポジウムから5～6年経った頃に、学生相談研究会議というのがありまして、学生相談に関わってるカウンセラーだけが集まって、2泊3日泊り込みで研修を行うというのですが、そこに河合先生が出てこられました。河合先生はその会議には、正確には分かりませんが2～3回は出てこられたと思うんですが、昭和60年よりも前のことですから、会場の白鳥会館という公的な施設の和室の大広間でシンポジウムを行ったんです。私はたまたま後ろの方に座っていましたら、シンポジウムの半ばぐらいの時に突然後ろの方に来て、

こう手枕で話を聞きだした人がいて、ふっと見たら河合先生なんですよ。で、私がこう振り向いて笑ったら、「これが一番頭に入るんだよ」って仰って…、私もその時はほんとに真似したかったですね。ずーっと畳に座りっぱなしで、事例研究やシンポジウムを聞いてると、やはり手枕で横になった方が、本当に話が頭に入ってくるだろうと思いました。それと同時に、河合先生ってほんとに自由な人だなあ、っていう風に羨ましく思ったことがあります。

河合先生の講演を聞き著書を読ませていただくと、非常に日常的な話題で語り口も優しいのですが、我々が思いも及ばなかったような切り口で、いつも新鮮な話をしてくださったという事が、いくつも思い出されます。私は2000年に福岡教育大学から秋田大学に転任したのですが、ちょうど転任したときに、秋田臨床心理士会が10周年を迎える時で、既に臨士会の役員の人が、河合先生にその時講演に来ていただく約束をもらってしまっていて、河合先生がお見えになりました。その時河合先生には、一般公開としての講演をしていただくのと、それから、会員及び医師を始めとする心理専門職者に向けてお話をしていただくのと、2つプログラムをセッティングしていたんですね。河合先生が来られて打ち合わせをしている時に、担当の者がそのことを話したら、いや2つも話せないよっていう事で、そのいわゆる内部向けのは、何か事例を出して、自分がコメントをする、そういう形にならないかなあと仰って、みんな青くなったんですよ。急に事例は用意できない、私はスタッフではなかったのですが、当時河合先生の下で臨床心理士会の副会長をしているという立場にいました。みんなもう戸惑ってたので、私も勢いで、じゃあ私が事例出しますと言ってしまいました。明日ですよ。笑いながら河合先生はじゃあそうしてくれて、いとも簡単に

仰って。それからもう、その後のプログラムは失礼して、大学に戻って、まとめかけてた事例を夜遅くまでかかってレジュメにして、次の日に発表しました。それは統合失調症の人への臨床動作法なんですけど、その事例では、動作法を行うと日常生活が活発になっていくのと同時に幻聴が聴こえる回数、内容も活発になって、いわゆるひどくなったのです。その後動作が適確に行われるようになると、幻聴もだんだん合理的に収束したというプロセスが見られた事例を発表したんです。その発表後に、精神科医の方から、動作による関わりは侵入にあたるのではないかという発言がありました。だから幻聴がひどくなったんだ、それは危ないのではないかという風な内容でした。私がおもいごと自分なりの考えを述べてましたら、河合先生は、それはいわゆるからだを通して内的活動が活発になったということであって、そういう風に統合失調症の人が活発になると、願望としての幻聴は増すことがあるだろう、ある意味もっと自分の願望について素直になり、自分の願望をもっと強調したいっていうか、もっと人に分かって欲しいっていうか、自分の中で願望が大きくなった、という事であって、いわゆる侵入にはあたらないのではないかと、いう風に河合先生が発言されました。それは、私は単にフォローしていただいたっていうのではなくて、そういう新しい考え方をいただいたなという風に思いました。その時、河合先生は自分もからだの事に関心があるので、長官を辞めたら一緒にからだと心理療法という事でやりたいなって、私だけじゃなく色々な先生に言ってらっしゃったみたいです。私もとても楽しみにしていました。

それから県士会で謝礼をしたわけですね。その謝礼の金額は、河合先生がどこか医学会で講演をするとか、どこかの会社から頼まれて講演するとかいう時の講演料に比べると、ほんとに

スズメの涙みたいな講演料だったんですが、先生はその場で中を見られて、こんなにいらないよって言って半分返してくださったんですよ（笑）。県士会の人たちはえらく感激しました。秋田はブナがとても綺麗なところで、5月の新緑のブナ林っていうのは、天空にレースのカーテンみたいなブナの葉がありまして、その隙間から太陽が射してくるっていう、ほんとに幻想的なすばらしいところなんですけど、河合先生は「僕はブナ林が凄く好きなんだよ」って仰って、じゃあ県士会は、先生がお仕事に一段落ついて余裕ができたなら、先生と奥様を、ぜひ秋田のブナ林に招待したいという風に意思決定してたんですが、それも果たせなかったっていう事で、とっても残念な思いがしております。

あと1つ、これは非常に個人的な事ですが、河合先生に救われた、そして河合先生は本来的にほんとに優しい人だったなと思った事を、ぜひともお話したいと思います。何かの会議の合間、2人である事があって、その当時、私はある人間関係で悩んでいまして、ついその事を話してしまったんですね。そしたら河合先生は、「その人はどこの誰ですか」って言うんですよ（笑）その言い方の勢いが……「いや僕がちゃんとその人に言ってあげますよ」という風な言い方をされたんです。私はその時に、鬼ヶ島に鬼を退治に行く桃太郎みたいなイメージがぱっと浮かんで、それで私はすっかりその人間関係の相手に対して抱いていた感情が薄らいだというか、それから職場に帰っても、もうその人の事が気にならなくなったのです。普通のカウンセリングでは、そういう対応はしないですよ。決してしないけど、でもそういう対応が人の心を安心させ、その人の不安を拭い去る。尊敬している先生が自分に、そういう気持ちを持ってくださったっていう事が、自分の中で確かな安心感を支えるという事を思いました。

心理臨床学会の常任理事をしている時には役員一同、先生から雷が落ちたように怒られた事もありました。その怒り方たるや非常に迫力があつたんですが、それでほんとに役員一同ピリっとして立ち直ったっていう事があって、そういう厳しい側面と同時に、ほんとうに優しい、人を受け入れ支えてくださるという先生の事を私は常々思い出して、何かへこむような事があつた時には、河合先生のそういう支えの事を思い出して、立ち直ろうという努力をしている次第です。河合先生には心より感謝しながらこれで終わらせていただきます。

岡田先生: どうもありがとうございました。（拍手）催眠学会とか、学生相談学会とか、色んな学会で、色々リードしていただいていたという事が、凄く浮かんできたんじゃないかなという風に思います。それからこの後、植樹祭をするんですけども、何の樹にするかという事で色々迷いまして、ブナの樹も候補に挙がったと思います。でもあれは大きくなりすぎるから、ちょっとあかんだろうという事で辞めたと思うんですけど、その時に奥さんと2人で秋田の方に行かれたような事を、ちょっと小耳に挟んだような気がしております。

では引き続きまして、認定協会の代表として藤原勝紀先生に話して頂くんですが、専任理事の大塚先生から電報を頂いていますのでここでご披露して、引き続き藤原先生にお話を頂くという形にしたいと思います。

大塚先生の電報: 故河合隼雄先生。本日は先生を偲び、先生にご縁の深かった京都文教大学の鐘幹八郎学長や岡田康伸学部長らの想いを込めた集いがもたれました。にも関わらず、本日は認定協会の実施する平成21年度の一次試験日です。私の立場上、欠席せざるを得ません。断腸の極みです。お許し下さい。今年度は受験生

も過去最高の2850名を数え、認定協会もこの9月には文部科学大臣から臨床心理士養成に関する大学院専門職学位課程の評価機関として認可されました。ますます社会の要請に応え、かつ2万人に及ぼうとする臨床心理士の正当な資質の担保と発展にしたいと思います。先生の3周忌によせて電信を捧げます。

平成21年10月31日 財団法人日本臨床心理士資格認定協会 専務理事 大塚義孝

このような電報を頂いています。それでは引き続き藤原先生にお願いします。

藤原先生：藤原でございます。本来なら、財団法人日本臨床心理士資格認定協会の専務理事である大塚義孝先生が最もふさわしい方だと思いますが、本日は私がこのようなご縁を頂いてお話をさせて頂くことになりました。

さてご周知の通り、河合先生は昭和63年(1988)に認定協会を設立され、最初の常任理事を務められました。その翌年に、1936名の臨床心理士が誕生しまして、平成元年11月1日には臨床心理士誕生記念の集いが行われ、同時に日本臨床心理士会が発足しました。河合先生は、認定協会から転出して初代会長になりました。先生と認定協会との関係は、形の上では1年間ではありますが、例えば平成3年に始まりました「こころの健康会議」の第1回沖縄大会以来、9回に渡って基調講演をされるなど、実質的には認定協会の中心的存在でありました。私は設立当初のこの肝心な1年間を詳細には存じておりません。最近になってこのことに気づきまして、与えて頂いた立場で何をお話させて頂こうかと思案しておりましたところ、「面接での肝心要の瞬間のことは記録なんてできるはずがないと、記録はないけど記憶はそういうもんだ」という河合先生の言葉が浮かんできま

した。なぜだかこの言葉に救われた気分になりまして、本日のこの席にたどり着いた、というのが正直な心境であります。もちろん河合先生は学会、臨床心理士会、認定協会はもとより、文化功労者、文化庁長官として、我々の顔、象徴であります。どこかに限定的な存在ではなく、全てに深く関わる大いなる元型のような存在であると思います。

しかし、本日を迎えるまでの期間は、私にとりまして、先生が改めて大きく深く身に迫る、まさに個人的な心の宇宙を彷徨うような、言葉を失うような日々でした。今の私には、あくまで個人的な河合先生であることを痛感した次第です。今日はそのような心境からお話しさせて頂かざるを得ないことをお許し願わねばなりません。

思えば、河合先生とお別れして2年と3ヵ月の月日が流れました。お別れして以来、19日は特別な日になりました。19日という日は私の誕生日にも当たる日であるからであります。私は昨年3月に定年退職致しました。最後の年が追悼式になりました。業績目録の最後は、河合先生を想う、という追悼文でした。その後も多くの方々の追悼文やお心に触れてきました。最近では、河合俊雄さんによる書物で、先生に触れさせて頂いております。

河合先生と初めてお会いできたのは、昭和42年(1967)の8月でした。大学4年生の時でした。成瀬先生と前田先生のご紹介で早速にご自宅にお迎え頂きました。天理のご自宅では、曼陀羅や催眠のことや、人間まるごとの心理学の必要性について即座に意気投合したような気分、身を乗り出すように語られる先生の迫力に満ちたお話にわくわくしたことを覚えています。その日はとても暑い日でした。電車の吊革を持ってお話を伺いながら京都の永松記念センターにご案内頂き、まずは箱庭を見せて頂きま

したが、すぐに別室に案内して頂いてオープンリールの講義記録をご紹介頂きました。私は夕日になるまで一人テープに聴き入りました。この記録がその直後に出版された、名著『ユング心理学入門』であります。当時の博多では、なお関西弁は肩身の狭い思いをする時代でしたが、その後の私は先生の独特の語り口調をまねたり、先生の考え方を有頂天になって話す、といった具合でした。九州大学の精神科の教授であられました桜井凶南男先生にご報告しましたところ、すぐ直後に、精神医学のシンポジウム「精神療法における治癒像の問題」に先生をお招き頂きました。先生のお話は、臨床心理学界で1968年に発表された『登校拒否者の夢分析の一例－ユング派の立場から』の事例に基づく新鮮で輝くものでした。お医者さんの中で語られる先生に、誇らかな気持ちで聞かせて頂いた感動が蘇ってきます。

大学院の博士課程の頃、九州大学に集中講義でお見えになられました。ユング心理学入門を中心に、お酒の合間に講義をしているのか、講義の合間にお酒なのか分からん、と終始笑顔でとても精力的でした。熱気と迫力に包まれた集中講義でした。その折に、大学に隣接する、精神衛生センターで箱庭の研修会をもたれました。ご案内方々参加してしまして、ふとしたいきさつから箱庭制作のモデルになりました。大きな箱の中の玩具を先生と探しながら箱庭制作をしました。見守り手としての先生の無言の迫力と、温かな寄り添い手としての先生との関係性の実体験でした。先生が九州で箱庭実習を行った最初だと思います。

38年ほど前に三大学院研修会が広島大の鑑先生のところから始まりました。この三大学院の場は河合先生、成瀬先生、前田先生、鑑先生が同席での醍醐味溢れる事例検討に直接触れることができるエキサイティングな機会でした。

夜には寝転んで心理臨床を学ぶためにはお酒と体力が勝負だとか、とにかく違う大学院の人間が集まること自体がものすごく大事や、と話されました。若い時に先生方の個性がぶつかる生の議論に触れる機会があることは、今もきわめて大切なことだと思っています。

河合先生は日本で初めて有料の心理教育相談室を京都大学に作られました。私はこの有料心理教育相談室が公式に設置された意味とその活動は、まさに自立開業モデルとして今臨床心理士への社会的なニーズや実力の現状を最も忠実に踏まえて考える尺度になると思っています。現在、全国の百数十の養成大学院での心理教育相談室にはどれほどのクライアントが訪れ、心理臨床を実地に体験して頂いているかを見つめながら、謙虚に堂々と臨床心理士として歩みたいと思っています。

先生は、臨床心理士の研修、特にSVについて強調され続けました。とりわけそれを行う指導者の養成に関心を寄せられました。私が指導者養成の博士課程を作りたいと申し上げますと、先生は早速文部科学省の審議官に会わせてくださり、まずは京大の附属センターに研究分野を設置することができました。これをもとに、全国の唯一ではございますが臨床指導者実践コースという大学院博士課程ができたわけがあります。先生は殊の外に感激して下さいました。そして、現代のエスプリでのSVに関する成瀬先生との対談では、日本の心理臨床の曙からこれらに至るまでまさに学会を創設されたお二人ならではの思いを語って下さいました。しかし、お酒を交わし身近に先生の口調と表情に触れながら、学問と心理臨床、そして人間への深く自由なお話を伺った最後の機会になりました。先生は、人間が好きでないと、と最後にしみじみと語られました。河合先生はかつて今もこれからも、無数の人々から好かれ、愛され

る存在です。それにもましてご自身が人一倍深く、人を好きで、人を愛し続けられた先生だと思います。

日本心理臨床学会の誕生と申しますと、即座に思い出すことがあります。1978年に日本心理学会が九州大学で開催されました折りに、最初の心理臨床家の夕べが内密に行われました。全国から80人ほどの先生方がホテルの一室に集まり、新しい学会を創設するためのものすごい熱気に溢れました。最後に宣言をすることになりまして、河合先生と2人で宣言文を作成しました。その後、名古屋、東京での心理臨床家の集いを経て、琵琶湖での京都集会で日本心理臨床学会が設立されました。時に4年後の1982年（昭和57）の3月のことです。私にとりましては、今なお唯一欠席したことのない、かけがえのない学会であります。それだけに、発起された当時の先生方のためにも学会の行方については、とりわけ気にして過ごしている昨今であります。

河合先生に出会うには、何と言っても事例検討の場が最もふさわしいと感じてきました。私の事例について直接にご指導して頂いた機会は、2度ございます。最初は京都で開かれた全国学生相談会議でした。先生の司会で統合失調症の事例にコメントして頂きました。このフロアでは三好暁光先生から20分を超えるコメントを頂きました。終了後に「あんなに三好さんが話すのは初めてや。10年分以上の話しやっただ」と満足顔で教えてくださいました。2回目は50歳の時に、京都女子大での学会でした。この時も、長年のプロセスを経て失禁症状が発現する統合失調症の事例でした。河合先生は珍しく、ご自身の統合失調症事例体験について語って下さいました。この2度の機会は私にとって不思議な経験と結びついています。最初の時には、同行の先生と京都駅から同時刻に発

車する上り電車に思わず乗車して、名古屋駅できしめんというろを土産に、九州に帰るという経験をしました。正月早々の事でした。次の機会には、若き日から憧れていた成就院庭園を探して京都の街を永遠と歩いた末に、結局はすぐ隣の清水寺にあるその庭園にたどり着きました。そして不思議にも、この庭園で思いがけず下の柱が三角形の灯籠に出遇いました。先生に出会うとよくこうした面白いことが起こるものでございました。

広島での事でした。ホテルの自室にお招き頂き、丁寧に頭を下げられて書評を依頼されました。『イメージの心理学』です。先生の御著書の書評をさせて頂いたのは『能動的想像法』とこの本の2冊だけですが、共に先生がメインにされているイメージ研究に関する大層重要な御著書であります。とりわけ『イメージの心理学』は大きな存在になっておりますと同時に、私の心理臨床学研究と実践におけるアイデンティティの根幹で河合先生と深く繋がる思いがいたしております。本日、なんとかここまでお話をさせて頂いて参りましたが、それもこの本で河合先生が強調されている「私の心理学」、つまり心理臨床は飽くことなく個に精進を置く営みだとするお考えに、勇気を頂いたからだと思っております。

「私」「個」と言えば、20年近く前に大学が主催する講演会で九州にお招きした時のことです。講演後の懇親会も終わり、10時頃に先生をお部屋にまでお送りしますと、突然「やっぱあんたのうちにいこうか」と言って自宅にお寄りになりました。ソファを背に足を伸ばされてお茶を飲んで自宅で過ごされているような、穏やかなひとときでした。午前1時過ぎにホテルにお送りするタクシーの中で、「明日も早いから」と言われ眠りにつきました。今私はこの時の先生のお姿に惹かれます。同時に何か

「孤独」ということもまたイメージしてしまう自分を案じます。先生は、子どもの世界と共に人生の後半、とりわけ人生の終焉の悲哀を律儀なほど大切にされたと思います。自然なお気持ちに嘘をつかない、誠に正直な日本嘘つきクラブの会長であったと思います。

京都でお世話になったある時、先生に「私の年頃の時どのように過ごしておられましたか？」とお尋ねしたところ、「ただ一生懸命駆け抜けていた」と一言おっしゃいました。先生の喜寿のお祝いをさせて頂いたのはつい最近ですが、その前日に資格問題の事情が急変致しました。その宴席で先生がなんとも複雑な顔をされて近づいてこれ、「また駆け抜けんとあかん」とささやかれました。私が直接にお聞きした、肝心なお言葉の最後になってしまいました。不思議にも今年の7月中旬に、先生が資格問題について私に語られる大切な夢を見ました。今なお東京のホテルで夜中につけたままのテレビに目を覚まして、放送大学の放送授業で語られる先生に思わず声を掛けたりします。深夜に電話がかかってくるような気もします。京都の教育界でも、人づくり21世紀委員会でも、パトナでも、文部科学省との関係者との話しても、世の中を歩いていると、全国どこでも河合先生との繋がりがある人々に会います。やはり、淋しさは感じます。しかし、これほど折りに触れて登場して頂けることは、ありがたい密かな自慢ですし、大きな誇りです。

今日は古いことも新しいことも、順序も内容もまとまりない話になってしまいました。私にとっては先生との記憶や出会いが時間や空間を超えて立体化され、曼陀羅のような心の宇宙イメージの中を歩んでいる感じなのです。曼陀羅の中心に、河合隼雄先生が揺るぎなく存在して下さっている感じがいたします。それにつけても今や自然界も世の中も、心理臨床の世界もバ

ランスが大きく揺らいでいることを感じます。それだけに幾多の二律背反を超えて、まさに命がけで絶妙のバランスを保ってくださっていた河合先生の大いなる存在を、今更ながら感じます。

最後になりましたが、毎日直に先生との暮らしを共にされた奥様始め、ご家族の皆様には先生からのお別れの日々は生々しさを伴う、寂しさも一入のことと想像いたします。それに比べると、私なんぞは先生と直接にお会いしたり、お電話でお話したりという機会は実際には全く少ないもので、今までもこれからもイメージの力で先生と歩いていくのだと思います。先生と「いつか初心について語り合おう」と約束したことを忘れず、このお別れを創造の病と受け止めて生きていかなければならないと、改めてこのシンポジウム体験を通して自覚した次第です。知恩院を思いながら、今日は私にとっての河合隼雄先生を語らせて頂きました。ありがとうございました。

岡田先生：どうもありがとうございました。藤原先生の心理臨床家としての成長の節々に、河合先生がおられたんだなあと分かった感じがします。いつの間にかおられて、布置というか、布置力というんでしょうか、そういうのがすごい先生だったんだなあということを思いました。

引き続きまして、日本臨床心理士会の会長の村瀬嘉代子先生から、河合先生を語るをお願いしたいと思います。先生、よろしくお祈りします。

村瀬先生：村瀬でございます。よろしくお祈りいたします。実は私は若い時から、早めに引退いたしましてひっそりと忘れられたような形で、ボランティアを健康の許す限りしながら暮

らそうという風に、固く心に決めておりました。今期の前の日本臨床心理士会の全国区の代議員選挙がございましたときに、私はそれに選ばれましたけれども、実は今期をもちまして、これでひかせていただきたいと先生に申し上げましたところ、先生は終わりまでお聞きにならず、「そんなことはあかんのや、あなたは残ってやるんや。わしを考えてみ、わしかて頑張ってるんや」とおっしゃられて、私はハッと背筋を伸ばす思いになって、非力をも省みず、そのまま今日に至って、臨床心理士会の仕事をさせていただいております。

シェイクスピアの戯曲の『お気に召すまま』という中にこういう言葉がございます。「人間世界はことごとく舞台である。全ての男女が俳優で、各自の舞台に登場して役を務める。」考えてみますれば、私たち人は成長しますと、それぞれ自分の時処位というものを意識的・無意識的に考えて、それに沿って振舞うことをいたしますけれども、でもどちらかと言いますと、私など心の弱い人間は、自分の立場で、自分の視野でものを考え振舞いがちでございますけれども、私は先生こそ、このシェイクスピアの言葉を一生生き抜いた方ではないかという風に思うんです。先生は多領域にわたる独創的で深い洞察に裏打ちされたご活躍をなさいましたけれど、その基底に一貫して流れているのは、人の心の健康と幸せをひたすら願うお気持ちに基づく、臨床心理学一筋であったと思います。先生は、19年にわたり1987年に発足いたしました日本臨床心理士会の会長をお勤めくださいました。私たちをいろいろな形で導いてくださいました。ここで細かく申すと時間がございませぬけれども、“臨床”というような言葉が全く世の中に市民権がなかった、「それは何？」と言われるような時代に、認定協会によって生み出された臨床心理士が質のいい働きをして世の中

に役立つように、そしてそれ相応の評価と、それから社会の中での位置付けを得るために、そしてそれによってさらに世の人々に役立つ存在になるために、ということを願って先生は会長職をお勤めになられたわけでございます。これは私の推量でございますけれども、ご苦労というのは本当に、言葉に尽くせないものがあつたと想像いたします。

ただ、私は先生と副会長を通じまして、かなり長い期間一緒にそばで仕事をさせていただきましたけれども、先生は本当にご自分のことで愚痴や苦労をお話になったことはございませんでした。考えて見ますと、ご立派な経歴を持たれ、立派な業績をあげられ、そして日本人では初めてのユング心理学での資格を取得されて、先生はご自分のことをお考えになれば、いろいろな所に折衝に行き、おっしゃいませぬでしたけれども、時には非常に辛い思い、時には屈辱を感じられるようなそういう場面に多く足をお運びになって、私たちのためにあるいはこの臨床心理学が本当に世の中で活用されるために、力を尽くしていろいろな交渉をなさってこられたはずでございます。こんな生臭いことを申してはなんでございますけれども、今壇上に並んでおります団体の中で、臨床心理士会というのは財政的に非常に慎ましやかな会でございます。お弁当もマグロが煉瓦色になりかけのような、そういうお弁当を食べて、でもいっぱい案件があるというような会議をしているような時でも、河合先生は独特のユーモアと機知をもって場を和ませてくださり、そしてよくおっしゃいましたことは、「絶対世の中で喧嘩をしてはあかんのや。喧嘩をしてはあかん。自分のことはしっかり主張し、いい仕事をすることは大事だけれども、喧嘩をしてはあかんのや」とおっしゃいました。私はこの言葉が折に触れて、たった今何うようように甦ってまいります。

今から18年くらい前でございましょうか、先生と、藤原先生も一緒にあつたあの北海道での不思議な、その名も“北ホテル”、たいへんロマンチックな名前のホテルなんですけれども、先生は研修ということに本当に力を入れてらっしゃいまして、殺人的なスケジュールの中、どんな研修会でも都合をつけてご出席になれましたが、ある年、北海道で河合先生と藤原先生と私と3人で、初任者と大学院生のための研修というのがございまして、出席させていただきました。その時、いろんな学会が札幌に重なりまして、それでホテルが取れなくて、名前が“北ホテル”というところにお3人泊まっていたかどうかと言われ、私たちは「なんとロマンチックな！」と言って胸を躍らせておりましたら、タクシーの運転手さんが「そんなものはありません」とか言われて、ぐるぐるぐるぐる札幌の街の中を歩き、「でも、何番地、ここです。」でもそこへ行きますと、表通りから見ますと、こう言っただけでございまして、決して億ションではございせんでしたよね。あんまり具体的に言うと…あの、庶民的な住宅群が建っているところで、「ここにホテルなんかありません。」「でもここなんです。」仕方がないので降りて、ビルの群れの奥の方に入っていきますと、中庭の奥のビルの1階と2階に「北ホテル」なる部分がございまして。その時藤原先生が、何とこれは、ちょっと差し障りがあるんですけど、「故あって駆け落ちしたような人が、ひっそりしばらく暮らすには料金もリーズナブルだし、目立たないし良いとこやね〜」なんて言われたのですが、つまりそういう所に3人は泊まりました。けれども、たいへん質素ですけど、そんなことは先生は全く意に介されませんで、夜寝る前にお話したときも、それから朝食のときも、日本の臨床心理学がこれからどういう方向に行くべきであるか、それから当時は本

当に、資格問題も先ほどから申しますように、めどが全く立ちにくく、たいへんな状況でございましたけれども、そのことをいろんな角度からお話になられ、一時も無駄な時間を過ごされない、しかもそれは全て人のために真剣にお考えになっている、しかもなおかつユーモアがある、というお話ぶりでもございました。

ただその時、先生が一瞬ふと冗談の間に真顔になられて、「自分が死ぬときにああおもしろかった、おもしろい人生やった、と言って死にたいな」と言われ、その次またちょっと間を置いてから「自分は実は本当のこと言うてへんような気がする。死ぬまで本当のこと言わへんのと違うやろか」とおっしゃいました。これは決して普通の意味で言うところの、本心を偽るとか人を騙すとか、決してそういう意味の本当のことを言わない、ということではなくて、先ほど申し上げましたように、先生は本当に皆に少しでも安心を与え、前の方向に力を合わせて進んでいくために、ご自分のことは括弧に置いて、常にいい意味での相対的視点を持って、ものをお考えであるが故に、生の気持ちをおっしゃらない、そういうことだ、という風に思った次第ですけれども、他のいろんな機会を思い起こしましても、こんなことを私が申し上げるのはたいへん僭越ですけれども、先生は本当に行き届いた温かいお心遣いをなさる奥様や、それから、本当に細やかに睦まじいご家族の皆様にお囲まれ、そして世の中からは国内だけでなくワールドワイドに高い評価を得られ、尊敬を集めていらしても、でもなおかつ本当の意味での深い孤独を一人で生きていらっしゃる方ではないかとふと思うことがございました。私は、人間というのは、実は、深い孤独をひとりで引き受ける、その厳しさに耐えることによって人の気持ちが本当にわかる、また、自分ではないいろんな状況について、的確な想像が出来る、今日は時間がない

ので細かいことには言及いたしませんけれども、そのことが、河合先生の多彩で多面的でしかも、常に最先端を掘り起こそうとしていかれた臨床心理学の底を支えていると同時に、類まれな臨床家としてクライアントの心に響く言葉をお話になられた。それは、誰よりもその重く深い孤独に耐えていらしたからではないか、という風に思います。

一方で先生は、先ほど藤原先生は二律背反を耐えて、とおっしゃいましたが、私が一言で申しますと本当に多面的にいろんな面を持っていらっしゃる絶妙なバランス感覚の上に先生の世界は構築されているという風に、いつも拝察しておりました。例えば先生の人間の内面の深くを洞察して話される言葉が、決してそれが単なる主観的な表現という風に聞こえなくて、深く人の心を打ちますのは、ご承知のように先生は数学の研究から心理学に転じられ、また普段お話していても、本当にいろんなことについてそれぞれの領域に造詣が深くていらっしゃいます。ですから、当然その足元にも及ばないのですが、私はいつも先生のある面だけを見て、そこだけ倣っていくと、それはとても薄く薄いものになってしまう。先生は、氷山の水面下にむしろ大きな体積がそこにあるのと同じような、むしろカウンターなものによってしっかり底支えされているからこそ、先生が内面を語られるときも、それは生の数字で数量化される以上に、説得力を持ったものとして普遍性を持ったものとして、人に伝わったのではないかということを、先生の学問の特徴として、私なりに考えております。

一方で先生はいい意味での子どもらしさというのでしょうか、チャイルドライクネス、これは決して未熟な大人の人に言う“とっちゃん子供”というそんな意味じゃなくて、健康な子どもが持っているチャイルドライクネスを持って

らしたと思います。どういうことかと申しますと、あらゆることに生き生きとした関心を持って、興味が開かれている。私たち大人は子どもに対して「仕事しなくてもいいし責任もないし良いわね、子どもは」という風に言いますけれども、でも子どもって実は大変なんじゃないでしょうか。社会経済的に本当の意味ではひとりでは生きていかれません。そして、実際未来がどうなるかということは誰も確実に保障してくれるわけではない、その不確定な未来に対して、今現在目の前のことに生き生きと関心を持って生きる、これは実は大変なことだと思うのです。これが健康な子どもの特徴だとアーウィン・シンガーという人は言ったわけですが、河合先生は、そういうところが本当に生き生きとしておりました。

ご承知のように先生はフルートの名手でいらっしゃるし、また音楽にもたいへん造詣が深くていらっしゃいましたが、ある国際学会の授賞式で、日本の学会の役員の何人かがその席に連なりましたときに、日本では英才教育をもって謳われております、ある音楽教室の幼児たちがバイオリンを手に、かなりの人数の子どもたちが舞台上で、これが子どもの演奏かと思うような、本当に技法的には素晴らしい演奏をしたのです。でもそれは何か精密機械が狂いなく動いているような、ちょっとメカニカルな感じのする演奏でございましたけど、河合先生は途端に横でちょっとこう足を揺すられまして、あれもなかなか率直なサインでいらっしゃいましたが、そして「ああ、あきまへんなあ、これは機械ですなあ。こんなんと違いますわ、音楽は」とか言われて、そういう少し改まった席でございましたけれど、それはみなさんもお存知の『浜辺の歌』です。先生は小声で歌をお歌いになられたんですね、そういうところもとっても何かチャーミングで、それは周り

のお客様にもちょっと聞こえるわけですけど、でも何かむしろ先生の小さな歌声を聞いて、その席と一緒に座っていた者達は、本当に春の夕暮れ、過ぎし日、それからこれからを思いながら穏やかな気持ちで浜辺を散策する、そんな自分になったような気持ちにみんながなって、舞台の上のメカニカルな音に言うに言えないハーモニーが加わったことを鮮やかに思い出します。そういう、先生はなんとも言えない無から有を作り出すような、何かそれで私達の気持ちを和ませてくださいました。

私が今もそれを思い出して自分の拠り所といえますか、萎える気持ちに「これではいけない」と言い聞かせることを一つ最後にお話させていただきたく存じます。本当にたまにございますけれども先生は夜遅く突然お電話をくださいます、「はあ」って息を切らせて、「今フルートの先生のとこから帰ってきたんや」、もう長官をなさっていていくつもの役職をなさっていて本当にご多忙のときでございますけれども、「今フルートの先生のとこから帰ってきたんや。いやあ、ちょっと練習せえへんと音あかんようになるんや。でも良かった、今日レッスンしてきて」とおっしゃってから、臨床心理学のこれから、世の中のこれからについて何気なくお話になることがございまして、私はそれを黙って拝聴させていただいたのですけれども、時たま先生は自分が初めてスイスから帰って、わが国に臨床心理学というものをこれから根付かせていきたい、これが大事な領域だということを夢中になって駆け抜けるような思いで始めたその頃の気持ちに比べて、何か自分の立場・自分の個人的な気持ちに関わる、それに重きを置いてものを考えたり言ったりする風潮が時々垣間見えることが寂しいなあとおっしゃいました。

そのことを私は今、折に触れて、非常に弱気

なものでございまして気持ちがひるむ時がございますけれども、今日の冒頭に申し上げましたように、やはり、人は生きているときに自分の時処位・役割に応じて相応の役を誠意を持って演ずる、そのことを河合先生はいつも身をもって本当にご自身の心身を削って伝えてくださった。私は先生のような広く高い、そうした学識の世界そのものにすぐに近づくということは出来なくても、先生のその人間としての生き方というものを大事にいつも思い出して、これから限られた時間の中に誠意を持って尽くして参りたい、そのことが先生にほんのわずかでございますけれども、お応え出来ることではないかという風に思っております。このような機会を頂戴いたしまして、本当にありがとうございました。

岡田：ありがとうございました。お話を聞いて、「本当のことを言っているかなあ」という言葉があったと思うのですが、植樹祭のときのプレートは『Truth lies here』という、先生がお好みになった文章になってます。『真実はここに眠る・横たわる』という意味と、『真実はここでは嘘をつく』という二つの意味が重なっておりまして、河合先生に相応しいかなあというようなことを思いながら聞いておりました。

では引き続きまして指定大学院協議会の代表として乾吉佑先生にお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

乾先生：乾でございます。指定大学院を代表してということですが、今日の話は河合先生についての個人的なお話と、そしてまた私の個人的な観点から見た先生のご業績ということについて話をさせていただきたいと思っています。

一言で申し上げれば、心理臨床ひとすじの生き方そのものが、河合先生のご業績ではないかという風に思っています。平成 19 年 7 月の 19 日に永眠されたわけですが、あっという間に 3 回忌を迎えられました。私はこれまで追悼式、偲ぶ会、追悼の雑誌編集と慌ただしく動き回ることで、河合先生との喪の作業を少しばかり脇において、この悲しみと侘しさをやり過ごそうとしていたと思います。本日の会に参加するために改めて先生と先生のご業績を振り返るとき、あの 2 年前の 9 月 2 日に京都会館で举行された故・河合隼雄先生追悼式での、感極まった気持ちが再びまざまざと蘇ってきたのです。それはこんな情景です。弔辞を読み上げるために祭壇近くに伺ってですね、先生の大きなお写真をふり仰いだときでした。なんとお写真の先生と目が合ってしまったんです。で、図らずもこの落涙というか、涙がこう出たい気持ちが、こうやにわに起こってきまして、非常に感極まってしまったんです。

私はそのとき「なぜ」とお写真に頭をたれながら当惑していました。私は先生とはもっぱら心理臨床の役割関係に限定した職業上の付き合いだけであって、つまり役員同士としての出会いであって私的な河合先生を全くといって知りませんし、もちろんご家族もお宅での様子も存じ上げません。フルートの演奏会も一回も行ったことがありません。時たま先生との雑談は、巨人阪神のファン同士の他愛無いやりとりだけであったからでした。ですからこの深い、私の心をえぐる静寂感というか、寂寥感といいますかは、どうしてなのか、と自問していました。それは壇上で弔辞文を取り出すわずか一刻、ひとときの出来事でした。その後も弔辞を私の口は正確に読み進めていましたけれども、その声の響きの背後から、耐え難い侘しさが溢れるほどの想いで私の胸に押し迫ってきました。席に

戻ってもその想いに圧倒されて、他の方々の弔辞をお聞きするどころではありませんでした。周囲の喧騒を聞くうちにはっと気がついたのです。私は臨床心理士会の上司を失ったのではなくて、心の支えを失ったのだ、と。職業上の関係と限定されていても、ほぼ 30 年間も一緒にすると、先生が私の心のなかに十分に染みておられたのです。そのような立場ですから、私のような立場ですら、今述べました感極まる気持ちや数々の心にしみる思い出が蘇るのですから、本日会場にご参集の河合先生を師と仰ぐ身近な方々の思いは如何ばかりかと思います。

河合先生とともに臨床心理学の諸団体の役員として心理臨床のありかたや臨床心理士について考える機会を幸いにも多く持つことができました。その立場から先生のご業績について、本日は述べたいと思います。河合先生のご業績をまとめて評することは、表すことは大変難しいのですけれども、あえて一言で述べさしていたくすれば、先ほど述べましたように“心理臨床ひとすじの生き方”であると考えます。もう少し説明させていただければ、心理臨床ひとすじの生き方を通して、臨床心理学に奇跡的な業績を生みだされたことだと思います。

具体的にどんな業績があったかは先ほどまでに皆さんがお話になってますけれども、改めて一度申し上げれば、ご業績の第一はここ 30 年をかけて、臨床心理学の盟友である大塚義孝先生をはじめとする多くの英知を発掘して、わが国に「臨床心理ワールド」という奇跡を巻き起こされたことです。つまりわが国の心理学会で最も大きい日本心理臨床学会の設立、文部科学承認の財団法人日本臨床心理士資格認定協会の設立、そしてわが国に初めての臨床心理士の専門職を見出し、全国都道府県にまたがる日本臨床心理士会という職能団体を組織し育てられました。さらにその教育基盤となる臨床心理士

養成のための指定大学院、専門職大学院を国公立・私学を併せてなんと164校も参加するよう働きかけられたことです。河合先生はこのようにわが国の臨床心理学の発展に寄与されるなど、大きな足跡を残されました。またその立場から市民の心の安寧に多大な貢献をなさいました。

第二の業績は、日本臨床心理士会の会長として、市民への心の支援を全国的に組織されたことです。河合先生は初代会長として7期・20年にわたって市民のために支援する臨床心理士の社会的活動に奮闘されてこられました。職能団体としての臨床心理士会の社会的活動方針を明確に提示され、その実践が市民への臨床支援、スクールカウンセリングの学校臨床心理士の活躍、災害や犯罪の被害者などへの支援活動、子育てや高齢者への支援など、各種の市民の心の悩みへの社会貢献や援助にもご協力できるまでに育てあげられたことです。多くの英知を結集したこの業績の1、2の心理臨床の組織化と臨床心理ワールドの構築は見事でした。国会議員の皆さまからも「単独で立派に育て上げられたこのような組織や資格を国家資格として国がいただいてもいいのですか？」と言わしめたほどのものです。そのような奇跡を先生は終始先頭に立ち、この30年間実践・リードされてこられました。

これらの社会的支援や心理臨床実践をリードし、進めてこられた背景には、以下の河合先生のお考えがあったように思います。人を大切にすることと、個人の中にすべての社会の問題がある、との一貫した視点です。その実践には、心理臨床の高い見識と技量向上を目指す研修が必要であると、常に語られておられました。ここ5、6年は国家資格問題を最後の大事な仕事と考えられておられました。文化庁長官をはじめ、政府関係の種々の役割を引き受けられたのもそ

のためでした。そして各県の、先ほど鶴先生のお話もありましたように各県の臨床心理士会の依頼にも決して断らずに、自分が行くことでその臨士会やその臨床心理士の会に勇気とがんばる力を与えることができるなら、と出発されたのでした。先生ご自身はまさに心理臨床ひとすじに臨床心理士の地歩を確固たるものにするために、東に西へ、そして諸外国にも日本の臨床心理学を紹介するために努力を傾けておられたのです。そして就任7期の半ばで20年間の会長職を閉じられました。

第三の業績は、たくさんの言葉や臨床心理士への心構えや姿勢を、400点以上にわたる著作としてばかりか、講演やコメントの中に示され残されたことだと思います。どのような言葉や姿勢を受け止めたかは、人によって異なるでしょうが、たくさんの言葉は私たち臨床心理士ばかりではなく広く一般市民の方々にも感銘深く受け止められ、敬愛されていたと思います。そして先生のものの見方・考え方は、ひとつの時代精神を形成するほどになっていたことは周知のとおりです。私自身は、以下の3点を心に深く刻むことになりました。第一は相手に対する深いねぎらいの姿勢。第二は先ほど村瀬先生も話しありましたが、人前で不平・不満を口にされないこと。第三はいいわけを決してなさらないこと、の三点でした。そのおのおのについて会議等で見聞したことを述べてみたいと思います。

第一の、相手に対する深いねぎらいの姿勢ですが、もちろん私たちでも身近な方やお世話になった方へのねぎらいは十分に思い当たるわけです。しかし驚くことに河合先生は、先生とまったく意見を異にする相手にもこの姿勢で望まれるのです。その結果、敵対する相手ともいつのまにか自由に話ができて、会議でもやがて腹を割った話し合いへと移行することがしばしば

ありました。

第二の不平不満を人前では口にされないことについてですが、先生は全国を回り役割も多いなどたくさんの仕事をされておられました。当然嫌なこと気に障ることなどさぞや多いと、下衆は勘繰りをするわけですが、しかし先生からは多忙さの不平や愚痴もお聞きすることはありませんでした。ある時、物事にあまりにも動じないように見える先生に、質問したことがありました。「私たちはクライアントさんのことで動揺すると、スーパーヴィジョンで支援を受けることがあるのですが、先生はどう対応されるのですか」とお伺いすると、即座に先生は「皆さんにはスーパーヴィジョン、わたしにはスーパードライがある。これが不満解消のもと」と、例の顔をつくりとなでながら煙にまかれました。

第三の言い訳を決してなさないことです、ひとたび決したことは何事もきっちりと履行し果たされました。資格問題でも、決断した後はどんな批判でも受けてたとうとなされました。言い訳をされず、責任感と一步も引かない豪胆さ、それは見事な腹のすわりであったと、横合いで見つめていたものでした。

これら三つの姿勢や態度は、近くで仕事するものは大変気分よく仕事に取り組みました。きっと他の領域でも、この点は頷かれるのではないかと思います。一方、この姿勢は実に河合隼雄先生の臨床態度を、垣間見せていただいているように、次第に私には感じられるようになりました。未だ先生とお付き合いが短かったころ、講演会でしばしば以下の言葉が先生から語られます。そしてそれを耳にしていました。つまり「心理臨床の根本はクライアントに対して役立つ仕事をするることである」というこの言葉です。あまりにも当たり前で自明の言葉で、私の胸に落ちずに通り過ぎてしまいがちでした。

しかしその後、会議や諸団体との交渉の場に立ち会い、先生の言葉や姿勢を見聞きするにつれ、心理臨床の根本はクライアントに対して役立つ仕事をするることであると言い切る時の背景には、クライアントの背景をしっかりと深くねぎらい、不平をもたずに黙々と一貫して聞き続け、そして問題に関しては一步も引かずに、真剣勝負で関わりあう豪胆な姿勢があることを、私は臨床心理士の一人として深く胸に刻むことになったのです。

河合先生のご業績となった心理臨床ひとすじの生き方は先生ご自身も書きとめておられます。最後にそれを取り上げておきたいと思います。その文章は日本心理臨床学会の二年前の9月に刊行された25周年記念号に寄稿された内容です。「心理臨床ひとすじ」とタイトルにつけられた先生の文章は、私には心に強く印象づけられました。次のように語っておられます。「他人から見るとどう見えるか分からないが自分としては自分の人生を心理臨床ひとすじに生きてきたと思っている。政府の役人などになって何を言っているのかと言われそうだが、私としてはこれらのことも心理臨床ひとすじの一環としているつもりである」との書き出しで始まり「心理臨床の根本はクライアントに対して役立つ仕事をするることである。一人の人間存在が文字通り世界であることを実感した」と語られ、「多くの書物を書いたが、やはり中核は心理臨床の仕事であるという姿勢は一貫してきたと思う」と述べられ、そして最後の結びの言葉に「私の心理臨床は死ぬまで続くだろう」とされています。まさに先生は心理臨床ひとすじの方でしたし、心理臨床が河合先生の最大の業績であろうと改めて考えるのです。そして私にはこの文章が単に記念の祝い文として書かれたものでも、また思い出をお書きになってもらいたいように感じられます。「体制的な政府の役人になっ

て」なぞいわれのない中傷・誹謗に心を痛めながらも、なお心理臨床のために歩み続けていた、先生の想いと決意をこめた文章内容ではないかと思われました。むしろこの背景には、ご自分のなしてきた種々の心理臨床の仕事を、受け止めかねている周囲の人々への大変な失意と怒りの気持ちもあるし、またそれでもなお心を奮い立たせ、心理臨床ひとすじという強い信念と闘志を心に飲んで、前に進もうとされている強い意志と、私たち臨床心理士へのメッセージが記述されているように思われ、今更ながら河合先生の肉声をお聞きした思いでした。

以上、私は河合先生の心理臨床ひとすじの生き方を通して、臨床心理学に奇跡的になされた業績について、仄聞した枠組みを含みながら取り上げてきました。もちろん本日述べておりますのは河合先生の業績のほんの一部に過ぎません。私の河合先生に対する畏の作業であろうとおもいます。その作業をお聞きいただきましたご参集の皆さまに、感謝して話を収めさせて頂きたいと思います。ご静聴ありがとうございます。

岡田先生：ありがとうございます。心理臨床ひとすじという言葉で、4人の先生方が語りたことが含まれてるのかなあと聞いておりました。日本の心理臨床関係4団体の方々からお話を伺って、最後に本学の学術顧問である樋口和彦から、それらを踏まえながら、先生自身の河合先生との関わりなどをお話して頂きたいと思います。先生よろしくお願いします。

樋口先生：今4人の先生方からのお話を承りまして、改めて河合隼雄先生が前代不世出といえますか、非常に稀にみる人格と識見をもって、この地上を歩まれたということに、今更ながら私は驚いた次第です。最近色々先生についての書

物も出ておりますし、私もそれを拝読していて、河合先生という方はこんなに凄い人だったのか、ということを変更して今感じております。

私と河合先生とは、ご承知のように公私共に約半世紀、五十年近くもいろいろの面で人生をご一緒してきたわけで、最も近い存在の一人だと思います。いつ話し合ったかは覚えていませんが、河合さんと私の間にはどちらかが真面目になったら、相手にタオルを投げるという約束を冗談まじりに話したことがありました。多分私がとかく真面目な宗教の世界で牧師をしていたせいかも知れません。つまり、ボクサーがリングに出て闘ってる時は一生懸命です。また、ホントに真面目にやらなければ、相手を打倒することはできません。何時の頃からか、先生も文部省相手だとか、政府のお役人相手だとか、いろいろと一生懸命に臨床心理士という資格のために戦っておられました。本当に文化庁長官という公務も大変なものだったでしょう。随分とご自分は我慢されたし、また学究生活ではそれこそあらゆるものを投げうって、臨床心理士の国家資格の問題に立ち向かっておられました。臨床心理ひとすじの生涯を送られたと思うんですね。ただ私は、その真面目さがじつは先生には危険だったと今から考えると思うわけです。

この臨床に携わる者というのは、外から見ると、時に気楽に見えます。河合先生なども、半ば冗談を言いながら凄いことをやっておられました。しかし、どうしてもやっぱりこの臨床という人の心の奥底と対峙する仕事は、あらゆる人を最後には本当に真面目にになってしまうところがあるんですね。やはり、これを自分の使命として直面するとやらざるを得ない、そのためには自分は死んでもいいと、時に思います。また、その様に思う位でなければ、人を治療したり、大きな影響を与えたりできないと思います。心

の治療というものはそういうものですね。

河合先生も、十分にそれはご存知でした。私も知っていましたから、本当は彼にタオルを投げるべきだったんですね。ご存知のようにボクシングでは、タオルが投げられたら闘いは終わりです。大抵セコンドの人が投げるんですが、テレビで見ていると、結構やる気満々のご本人はまだやる気であることが多いんですね、…その時、問題は投げる人の質と時の問題なんですね。あまり信用出来ない人が投げても、選手は「こんちきしょう、俺はまだ戦いたいのによけいなことをしやがる…なぜ、変なもん出すんだ!」と思ってしまいます。だが、ホントに信頼してる人が投げたら、彼がどう思っても闘いは止められる筈です。

つまり、私はその機会を失った。これは私にもいささかの責任があります。今でも、ある意味の相済まないと思っています。こうして私が生きているとやはり済まないという気持ちがありますし、河合先生にもう少し生きていて頂きたかったと思います。京都文教大学の学長を辞めてもう一年になりますけど、やっぱり私の心の方隅にそれが今もあります。「済んでいない」というか、そんな気持ちです。そして、彼を失った寂寥感、底知れない寂しさというのが私にはあります。

しかし、ここまで壇上の先生方のお話をお聞きしていて、まだ先生にして頂きたかったという残念な気持ちと、それにも関わらずこの短い生涯の中で、よくこれだけ河合先生はやったあなという感慨があります。私は先生のなされたことを、かなりよく知ってる筈ですけど、色々なご本を改めて読み、また人々のお話をお聞きするにつけ、私の知らないところで本当に先生はようやとったんですね。改めてその偉大さというものが分かります。私にもいくつかの分野を異にした研究のモチーフがありましたが、

先生の研究と業績は多方面でした。何といても、その内の最大のひとつは、やはりユング心理学を魂のある心理学として、日本に植え付けたいという志でなかったかと思います。そのためには、ちょっと飛躍するようですが、やっぱりこの日本に新しい大学を作らなければならない、そして大学を作ったら、博士課程まである立派な総合大学に、きちんと教育システムを作らないといけない、と言われていました。また、その大学の学問の水準と学風が学会の中できちとした位置を占めて、そこから輩出される卒業生たちが世間からちゃんと認められなければならない。つまり「臨床心理士」として、医師と同じくらい国際的レベルで、その責任感と共に働かなければならないと言っておられました。難しいけれど、是非ともそれに耐えうる人間を、教育機関の中で作らなければ意味がない。そのための分析心理学を中心にした教育といえますか、真の臨床教育の場を確立したい、という気迫をもっておられたと思います。設立初期の頃、お会いする度に熱っぽく言われまして、言葉は悪いですが、私は誘い込まれたというか、私は非力で、騙されたというか…という訳です。

そして、1つの新しい大学を作ることが、どんなに大変なことか…よく分かりました。そういう意味で今では、私はその荷物を鑑先生に回して、鑑先生の顔がだんだんに険しくなってくるように思われて、少々責任を感じます。先生は前にはもっといつも嬉しそうな顔をされていたと思うんですけど、これは実に気の毒やなあと思います。ひたすら先生のお元気を願って、この壇上から声援をお送りする次第です。

けれども、つくづくこういう大学をまがりなりにも作り、それを今日まで皆さんが維持してきたことが、どんなに大きな意味があったかと思っています。お話の中にも臨床心理学の四大学の大学院のセミナーがありましたが、河

合先生が後から出てくる後輩たちにじつに良い訓練の手法を残されました。ご存命中には本当にそれに心血を注いだことが偲ばれます。ここにいられる先生方の中にも、多くはなんらかの形で河合先生の薫陶を受けた方たちだと思います。これを見ても、広く教育的な影響を与えられた人物であり、こうした例は他にはないと思います。思い出すのは設立の頃のこと、今でもはっきり覚えています。語弊を恐れて言いますが、「樋口さん、僕ら臨床の学者は皆お金がないから、理想の教育の場所や安心してカウンセリングをする場所をもっていない。土地買って建物作ることできないしね」と言われていました。「だけどそういう機会があるんだよ。樋口さん、ひとつ頼むよ！文化人類学と一緒に、やったら面白いよ。」そして、私は彼の大望に誘い込まれたというわけです。当時、河合先生は他のお仕事でお忙しかったからでもあります。先生には日文研の所長のお仕事もありましたから。それで私が頼まれたということなのです。

私は先生からいろいろと他にも頼まれました。また、箆屋のように喜んで片棒を担ぎました。例えばユング心理学を本格的に日本に植えつけようとした時、まずユングクラブから始めました。これはスイスにもあり、ユング心理学の母体で、ユング研究所もこれを土台として間もなく発足した訳です。わが国でも上智大学のインモース先生が初代の会長になり、私が副会長でその後ずっと会長を務めました。会誌の『プシケー』は約四半世紀、25号の終刊号まで刊行し、丁度先生が倒れられる直前まで続き、先生はご自分の一生について語られ、それが奇しくも最後の講演になりました。

そもそもこの「ユングクラブ」が発足した時、この名称について議論しました。クラブは学会でもなく、研究所でもなく、これはかなり曲者

の名称なんですけれども、つまり「好きな人の集まり」という意味で、将にこれはユング的でした。スイスでも分析家の養成期間である研究所の創設時に、ユング自身もはじめ研究所の設立は認めてなかったんですね。クラブはずっと昔からあり、ユングもしばしば講義をしました。夢の分析などというものは、まず自らが受ける教育分析から始まり、個人から個人に伝えられるものであり、集团的な大きな教育機関で行えるものではないと考えたふしがあります。だから、彼は初期にはそう思って反対したのです。やがてその意見を変えますが、日本でもユングクラブが最初に出来た訳です。

このようにどうユング心理学をわが国に正しく伝えるか、という問題は先生の頭にありました。どこで、教育訓練したらよいかという問題です。私はある時、面白い話し合いに出会いました。小此木啓吾先生が関西に来られて研究会をしたことがあります。河合先生と、このことで二人は話されていました。私はたまたま傍で聞いていました。その時の私の印象は、小此木先生は関東では、ものすごく怖い先生という噂だったけれども、関西に来ると、お優しい人に見えました。この時もそうで、二人は真剣に話されていました。その時のお二人の議論は、今でも覚えています。本当の臨床教育というのは、日本ではどこで出来るだろうか？ということでした。勿論、小此木先生の頭には精神分析のことがあったと思います。ご承知のように、元祖のフロイトは結局ウィーン大学という大学では出来ず、大学というアカデミアから離れて、個人のプライベートの場所で行ったわけですね。この時、小此木先生はしばらく考えてられて、やっぱり自分は日本の場合は医学部だろう、とおっしゃいました。臨床の医局を中心におやりになるおつもりと私は思いました。私の記憶に間違いがあるかも知れませんが、私は確かに

そう聞いたように思うんですね。そして、河合先生も聞いておられまして、「樋口さん、やっぱり僕は京都大学という大学でなんとかしてやりたいと思う。日本ではやはり大学が学問の中心だからね」とおっしゃたと記憶しています。それで、「あなたどうする?」とは直接聞かれなかったが、聞かれたら自宅に分析室を作ってやりたいと答えようと思っていた。当時同志社大学ではバリエードなどがありまして、研究室に入れないことがありました。最初は研究室で始めましたが、やがて紛争が激しくなって、大学の中に入れず、クライアントと転々と分析の場所を求めて放浪した時もありました。そのような時を経て、私は自宅に分析室を作ってやることと決めたわけです。

河合先生はやがて、京都からもっと広く日本の臨床心理学を確立しようとして、活動も始められました。河合先生らしく、臨床心理学をひっくり返して心理臨床学会をつくられた訳です。その消息は皆様よくご存知の通りで、先のシンポジストがお話したところです。私に話が回って来たのは、その肝心の臨床心理士の養成機関である認定大学院の連絡協議会を発足させることでした。私は約150校の大学院の連絡協議会を設立し、その会長の責任を負いました。その間、幾度も河合先生とお会いする毎に、私を励ましてくれました。ご自身も特に臨床心理士の国家資格の制定には、心血を注いでおられました。そして、やがて社会的に臨床心理士が社会から認められることを夢見ておられました。

しかし、ここで問題になるのは、その技量です。社会から本当に認められる心の専門家としての技量というのは、どこで出来るでしょうか。私は、こういう臨床の大学院を作りながら、臨床教育には立派なシステムとしてのスーパーヴィジョンと個人の教育分析が必要だと思って

いました。そのためには、すでに京都大学では河合先生が始められたシステムがありました。これを土台に、京都の大学が共同し協力して、自分の学校の生徒だけを教えるのではなくて、他所の大学の学生も教え、反対に自分の大学の学生も他の機関の先生に教えて頂くことが必要だということが分かって来ました。やってみると、面白いことに自分の学校の生徒は、意外と他の大学の先生にはいいところを見せようと努力するが、自分の学校の大学の先生には、「宿題でちゃんとやれ」って言われても時々やりませんけど、他の学校の先生の言うことはちゃんと真面目にやってくると、いうことがあります。

また、ちょっと余談ですが、臨床教育でスーパーヴィジョンなどをやってみると、学生さんがどの先生がどの様な教育をされているか言ってくれるので、先生方の教え方が手に取るように分かるんですね。これは互いに先生同士も切磋琢磨することになって、真剣に臨床教育がなされるので良いことだと思います。

また、時に学生さんの指導を受けていた先生が亡くなることもあります。それがどれだけその学生さんにとって悲しいことかも分かります。その様な時、1つの大学にそんなに臨床の先生は多くはおられませんから、学生さんのためにはこのような制度は助け合いの立場から必要だと思いました。また、異なった流派の仕方を教えて貰えるので実にいい制度だと思います。これは申しましたように困難の中で河合先生が考えて始められたもので、これからも臨床教育の特徴として受け継がれて行くでしょう。

つまり、臨床教育は、個人と個人の関係であると同時に、やっぱりその場所、その時代の教育でもある筈です。そういう意味で小此木先生や河合先生たちが考えていたことは、ただの学校教育だけでなく、日本全体の人間教育だったように思います。この様な意味で河合先生は

一生懸命取り組まれて、その志半ばで生を断れた訳です。非常に河合先生にとっても惜しいことだったと思いますが、その分、その大きな責任を若い人たちに託されたのだと思います。

実は、河合先生がご病気になられたのを聞いたのはオランダでした。その時もちょうど空に虹が出ていた様に思います。その時は、倒れられたけれども、河合先生は意識がなくなっただけで、その内すぐに意識を回復され、ぱっと目を覚まして「樋口さん、あの世に行ってみると、あんたの言っていた世界と大分違うよ。僕はね、六道世界を巡ってきたがね」と、例の元気なお声でいたずらっぽく話してくれるんじゃないかと、私は思ってたんです。半ば目を覚ますのを期待していました。ところが、ついに先生は意識を回復されませんでした。先生のベットの側におられた方にお聞きしますと、いよいよ無意識が一年ほどになり、先生が亡くなれるその時、まるで自分は意を決したかのようにずっと旅立たれた様に見えたそうです。勿論既にお話はお出来になられなかったですけども、明らかに違った感じで、それから以後は確かに先生のお体はもう同じくそこにあったけれども、先生の魂はもうそこには明らかにいないという感じだったそうです。多分、先生は考えて、後を若い人たちに託し、そっと去られたのではないかと思います。

もう一つの先生の課題は、晩年のユングと同様に西洋と東洋の融合という課題ではなかったかと思います。ご自分は東洋人でありながら、アメリカ、スイスに学び、いわばこの近代世界の最先端の科学思想を学び、特に河合先生は理科系の数学を初めに専攻しましたから、その客観的科学的思惟には誠に精通しておられました。私はその様な意味では先生はずっと科学者であり、そうでありながら、その西欧的な思惟に疑問をもっている人でありました。ご承知の

ように、最初、ロールシャッハテストを勉強しにアメリカに留学されましたが、スコアを科学的に操るクロッパーのところで、反対に客観的な物事の判断ばかりが科学的でなく、その奥に存在する「こころ」を臨床的に極めるという道に進んでいかれました。そのため自ら夢分析も受け、スイスに行って本格的にユング心理学を研究することになったのです。つまりこの西洋世界は、やっぱり心を客観的に離れて見すぎる。客観的な観察はいかにも精緻であるかもしれないけれども、その情報は探求する治療者だけの側がもつよう偏ってしまって、もう一方の患者さんの世界の情報というものがほとんどない。これは情報のインバランスといいますか…アンバランスというか、これでは駄目で、患者の深い無意識の世界を知ることなしに本当の学問はないと考えます。フロイトもその著作集の中でこれは新しい科学だと言っています。これは『素人における精神分析学』という論文で彼の実験集にあります。ここで彼は自分は新しい科学を発見したんだと言っています。

この新しい科学というものは、400年も500年も続いた近代の科学とは違って、人間の心を取り扱うものです。人の心は一人一人違う世界を持っていて、これはその人から情報を聴く以外には知り得ないし、たとえ、こちらの尺度で幾ら対象に関して推定しても、その尺度が違っていているから、どこまで行っても捕まえられないとしました。ユングも分裂病の治療を中心とした病院の中でこれらの人々を丹念に診察してから、無意識のその象徴をずっと探求した訳です。確かに最初は分からないけれども、その情報に対して真面目に直面すれば、彼の誕生以前の系統発生理論でいう無意識が分かってくる。これが人間の全体性であって、そういう観点から見ると、現在の近代科学は、いかにも偏りがあることが分かって来た。夢を通し、もう一度、

全体性の無意識の世界にその人が接触することによって、全く違った見方が現れてくるんです。奇跡のようなことが起きてくるんだと考えたわけです。わたくしは河合先生がそのような近代という西欧世界の思惟を超えたところを目指されていたと思います。

その証拠が、箱庭療法などの日本への取り入れ方に現れています。西欧ではとくに日常生活に使われていない象徴というものの、イメージがまだわが国にはたくさん存在している。一見して日本人は洋服を着て現代人に見えるけれども、ちょっと一皮剥いてみると、それはまったく古代人と通低していると先生は考えた。だから、まず箱庭療法をここに持ち込んで、見えないものを見えるという形でシンボルの意味を教えたのだ。それを手がかりに日本神話や昔話の研究、それに仏教の思惟を現代人の魂の問題として提示したのであったと思います。

河合先生はただ心理学の世界だけではなくて、芸術学、文学、哲学などの世界の人々と様々な、いろいろな形で対話をなさいました。そして、膨大な量の著作を残されました。私は冗談で河合さんの本は一冊二冊と勘定するのではなくて、メートルで勘定するんだ、5メートルとか、6メートルとかって言うんですよ、と言ったことがあります。ここ文教大学の図書館には確か河合先生の全著作が提示してあるはずですが、皆さんも実際に測られたらよいと思いますが、これからまだまだ先生についての本は出るでしょう。幸い膨大な著作を我々に残してくださった訳ですので、これからはその著作を通して、身体的な河合先生はもう亡くなられましたけれども、著作の中にある先生にはお会い出来るので、我々は先生とこれから学問的に対話し

て育てられようと思っています。

(以下、スライド写真を紹介しながら、思い出を語る：省略)

これで、終わりでございます。このように実に個人的な思い出で失礼しました。ご静聴を感謝します。

岡田先生：ありがとうございます。河合先生を語るということで、過去のことが多かったんですが、未来に対しても言及していただいて、よかったかなあというふうに思います。以上が用意しましたシンポジウムで、この後、植樹祭をします。植樹する木はハナミズキ、二本というふうに決まっております。色々あったんですが、大きすぎるとか、今植えるには不都合だとかあって、そういうことになっております。時間がちょっと押し迫ってますが、35分からやりますので、時間がある人はどうぞご参加下さい。出ていただければ院生等が案内すると思いますので、その場所にお集まりいただければと思います。35分から開始したいと思います。どうも、お忙しい中、大勢とは言えないんですが、お集まりいただいてありがとうございます。河合先生と京都文教大学とのかかわりというか、そういうことを基にしてお話しいただいて、色々考えさせられたかなあと、そんなことを思っております。本当にどうもありがとうございました。先生方、どうもありがとうございました。

司会：ただいまをもちまして、第三回河合隼雄追悼記念式典シンポジウムを終わらせていただきます。